

アクセル・ワールドに白龍皇を！

グウィビ丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

発達である同期の結婚間際のカップルを庇い葉中に刺されて死んだは、神を名乗る亀○人風の爺さんに第2の生を与えられ、クジ引きでアクセル・ワールドの世界に白龍皇の鎧をデュエルアバターとして貰い異世界転生する事になった。

そして第2の生の名前は霧島龍元。もう一つの名は《ホワイト・アルビオン》

今まで発生したことの無いアバターの色被れを発生させた。

この実例のない現象から何が起るかは分からない。しかし、彼の登場は加速世界を大いに揺るがせた。

目次

プロローグ	1
略奪者と半減者	
加速世界	11
アキハバラBG	21
ホワイト・アルビオン	30
すれ違い	40

プロローグ

突然ですが皆さん、転生というモノをご存知ですか？

最近では、賢者の成人男性が死んで突然スライムになったり、死因をバカにされてムカついて女神を連れて異世界転生したりと色々あるが見ていて楽しかった。

そう見ていてはだ

え!? 誰だお前は!? って、

すみません。前の名前はコッチに来る際に消去されたようです。

コッチでの名前は後ほど言いますので少々お待ちを。

そして何故、こんな話をするのか言おうと、

自分が転生をしたからですよ!!

ビックリだよ！同期が結婚間際の相談という途轍もなくうらやまけしからん約束があり、店に向かう際に薬物中毒者による殺傷事件が目の前にあった。

まあ、流石は同期の女子の間でモテまくっていただけの事あるな。彼女を庇おうと前に出た。うん流石だよイケメン。

薬中はナイフを振り回しながらコツチに来た。このままではダチのアイツが刺される。と思ったオレの咄嗟の行動は自分でも驚きだ。

2人を突き飛ばし庇った。

その結果、デデーン！オレOUT！！となった。

まあ、只ではやられん。

持っていた携帯で顔面をタコ殴りにした。

ナイフ刺さったままだけど。

我ながら火事場の馬鹿力スツゲー！と思った。

気絶した薬中を見届けたオレは崩れ落ちた。当然だな。

2人は倒れたオレに駆け寄り泣いていた。顔面涙でぐちゃぐちゃになってるよと笑ってやった。

なんでも今日は三十前で童貞で彼女のいないオレに自慢しに来たんだとよ。

だろうな！！だってお前時よりドSだもん！！

『彼女と別れたら呪い殺す』と言ってオレは死んだ。

彼女欲しかったなア、チュウとしてみたかったなあ、

もつと甘いもんとか食いたかったなあ、

と思っていたら、突然人魂状態で神を名乗る亀○人みたいな爺さんがいる真つ白な空間に来ていた。

本人曰く、悔いのある非リア充の魂の担当神らしい。

嘘クセエ〜と思った杖で叩かれた。人魂なのに痛かった。

爺さん神曰く、二度目の人生はアニメや創作系の世界とかからでもオツケーらしい。

でも条件は結構あるようだ。

その条件とは、

1、生前の名を思い出せなくなる。

これは、新しい世界で名を付けてくれた親に対して申し訳がないためだ。勿論、元の世界の親の事も思い出せないらしい。寂しいな。

でも、『それは元の世界で残して来た人達も同じじゃ。ただ、自分のことを相手が覚えてくれる限り、元の自分は死なん。だからこそ、次の世界で悔いのない人生を送れ!』と威厳ありありで言われた。何この爺さんカッコいいな。サングラスにアロハシャツ着とるけど。

2、行く世界に関する知識は抹消される。

3、かなりの悪事をすればオシオキが来るようだ。

これは、転生の際に持っていったモノで好き放題させないため。オシオキの内容はその悪事よって変わるようだ。

なにそれコワイな。

4、転生の際に特典を一つ貰える。

ただし、チート過ぎて現実世界に影響を与えさせないため弱小化する上にこの爺さん神のクジ引きらしい。

5、転生世界は、爺さん神がクジ引きするらしい。

その世界によって転生特典の能力も変わるようだ。

で、オレの行く世界はアクセル・ワールドらしい。

良かったあー比較的平和な世界だった。

バーストリンカーになれるのは運次第らしい。

平和に第2の生を原作に関わることなく安泰に一生を終えた転生者もいるようだ。

そして、気になる転生特典はなんと!!

HDDの白龍皇だった!!

ええええええええ!!うそーん!

能力はデエルアバターで確認してくれだって。

ある程度弱体化はするようだ。

『どう育てるかは自分次第。しつかりと第2の生を生きていけ!』と言われた。そして、オレは自分にチャンスを与えてくれたこの爺さん神に改めて感謝しお礼を述べてから転生した。

転生する際に家族の今後の幸せを願い、オレは旅立った。



名乗るのが遅くなりました。

私、霧島龍元きりしまりゅうげんは転生者です。

赤ん坊としてやり直しの人生を送りました。

この世界がアクセル・ワールドの世界である事以外はこの世界に関する事は思い出せない。生前の名前は???という風になっていて思い出せなかった。前の両親の事も顔にノゾ~~ズ~~ズ~~ズ~~ズ~~ズ~~の様な物がかかっている分からなかった。

やっぱり寂しいなっと思ってしまった。

そんなオレをどう思ったのか、此方の世界の両親は幼いオレを挟んで一緒に寝てくれた。

その時、母から

『辛い事も、悲しい事も、楽しい事も一緒に半分にしよう』

が母の口癖だった。その時のオレを見る父と母の目が本当にオレを愛してくれていると訴えていた。

その夜からオレはこの2人の息子として生きていくのだと改めて再確認した。

それが四歳の時だった。

そして、時は流れて五歳の誕生日にニューロリンカーという首回りに装着する量子接続通信端末。民生用第一世代機は当時の大手機器メーカーである《レクト》と《カムラ》により、2031年4月に発売された。ネットに接続して脳細胞と量子レベルでの無線通信を行うことで、仮想現実^{V_R}や拡張現実^{A_R}といった技術が容易に実現でき、仮想の五感情報を送り込んだり現実の五感をキャンセルしたりすることができる。この端末は携帯電話やパソコンといった従来の一般的な電子機器、財布^{電子マネー}、さらには眼鏡などの視力矯正器具の代用にもなる。その上、ニューロリンカー用家庭ローカルネット、ホームサーバーもある程度普及しているほか、学校の授業でも黒板への板書や教科書・ノートをARに置き換えるなど、教育の場にも導入されているらしい。

ちなみにオレのニューロリンカーはメインカラーが白で青のラインが入っている。我ながらカッコよかった。けっこうテンションも上がった。

コッチのゲームは大分進んでいたので生前体験する事が出来なかったVRゲームをやりまくった。

ゲームしすぎは良くないと親に叱られたりもした。

とまあそんな感じで平和に過ごして来た。親戚の倉嶋さんの家が近かった事もあり、よく娘さんである千由里、千由里の親友である有田春雪、黛 拓武とよく遊んで遊んで！と三人に服を引っ張られまくった。まあオレの方が二歳も年上だから弟や妹が出来たみたいで嬉しかったからよく遊んであげたり、同級生にはせっかちな性格なのか、簡潔に言葉を略したりする子もいたりなど結構楽しくやっている。

でも悪夢は突然訪れた

両親が殺された。

それは、オレが小6の時だった。いつもの様に友達とバカやったりして学園生活を謳歌して家に帰ると、父が知らない男に刺されていた。

知らない男はオレを視界に捉える真っ直ぐ父の血で汚れた包丁を振り下ろして来た。オレは父のことで頭が一杯で動く事が出来なかった。そんなオレを母が庇ってくれた。そして、母は死んだ。『逃げて！』と最期までオレを案じてくれた事は嬉しかったけどそれ以上に、あんな優しい父と母を殺したこの男に対する憎悪が頭を塗りつぶした。この男を殺したいという感情がオレの頭を埋め尽くした。

視界が赤く染まるほどに殺したいと思った。がむしゃらに手を動かして子供ではありえない腕力で男を突き飛ばした。オレはそばに落ちていた血で濡れた果物ナイフを手に握った。そこからの記憶はオレにはない。

その後の事は覚えていない。

それから四年の月日が流れオレは高校生となった。

里親の名義で部屋を借りた。中三の頃からせつかな友達の勧めでケーキ屋でバイトをしている。

こんなオレを雇っていいのかと尋ねたら、

『NP。リュウは私の大事な友達。それにリュウの作るお菓子はどれもこれもDLS』

と言つて雇つてくれた。かなり嬉しかった。涙が出そうになった事をからかわれた。

*ちなみにDLSとはDeliciousの略。

~~~~~

以上がオレ、霧島龍元の高校の行く前のハナシ。

新しい制服に袖を通して、新しい学校で新しいクラスで新しい学園生活を送ることとなった。

教室は、周りの生徒は近くの席の人とだべったり、知り合いとグループを作りかけていた。

教室にオレが入つて何人かと目が合うが全員ビビっている。

それもそうだオレの見た目は、かなり伊達眼鏡をかけているが目付きが悪いのは欠かさず、顔も少々イカツいためヤンキーに見えてしまう。

ちよつと落ち込むな。

席につき、ニューロリンカーに保存しているネット小説などを読んで暇を潰していると渋い外人の爺さんが来た。どうやらこの人がこのクラスの担任の様だ。

名前はショーン・コネコネ先生らしい。どっかで聴いた名前だな。「ソレデハ皆サンに自己紹介ヲシテ貰イマス」

かなりカタコトだなこの人。

其々自分の名前、好きなものなど安易な事を言っている中で、

「掛居 美早、以上です」

相変わらずのせつかちな性格なため、聞きたい事は後で聞いてと言  
う意味だろう。

ショーン先生も暖かそうな目で次の生徒に回っていた。

オレの前の席のチャラつとした茶髪の男子の番で、

「かんざきかずき門崎一紀だ。気軽にカズキンって呼んでくれ。好きなアイドルは、  
シーたんこと新川支那さんに心火を燃やしてフォーリンラブです！  
以後一年間よろしくおねがいます!!」

と、中々ど偉いのが前のヤツの様だ（ー；）

次はオレの様だ。

出来るかぎり普通でいこう。何人かワクワクしてるヤツもいるな。  
後その中に門崎も入っていやがる。

「霧島龍元です。好きな物は甘いもの全般です。こんな見た目ですが  
普通に話しかけて下さい。」

と普通に終わった。

門崎も甘いものが好きなのか、気軽に話しかけてきた。途中からア  
イドルの話になったが。そこは、『オーバーヒートしスギデス』と言わ  
れて止められた。その事で教室に笑いが広がった。

しばらくして昼休みとなり、弁当は自分で作って来ているので取り  
出して何処で食べようかと思っていると、

「リュウ。話があるから一緒に来て」

とオレのバイト先のオーナーこと掛居 美早がオレの返事も待た  
ずにそそくさと教室を出た。

相変わらずのせっかちなさんな事で。

会話のないまま屋上へ行き、空いているテーブルを使い向かい合わせで座った。

「で、どうしたんだ美早いきなり？」

「話の内容は直結で」

「はあ!？」

「直結で」

「イヤイヤなん「3秒まった」ええー!」

と又もやオレの返事も待たずにニューロリンカーの直結ケーブルを取り出しオレのニューロリンカーと美早のニューロリンカーは直結した。向かい合いのこの状態でも余裕の長さがあるため移動せずに済んだ。

そもそも《直結》とは有線で直接通信を行うことも可能でありその場合には防壁セキリユティの9割が無効になる。ある程度のリンカー操作スキルを持つ者ならこの状態で接続している相手のプライベートメモリを覗くことなどもできる。

ようはニューロリンカーの中身を相手にさらけ出す行為だ。

そのためこの《直結》は家族や恋人関係の相手に限られる。

世間一般では公共の場で直結する男女は99%までが付き合っているということと見なされ、ケーブルの長さが親密度を表すという俗信まであるほどでもある。

そのため新入生の男女が昼休みに昼食を食べながら直結しているためかなり視線が来る。美早は見た目はとても美女に入る分類で大人しく、クールビューティが似合う女子と言えるだろう。そんな女子と直結なんぞ入学早々にしてみろ。絶対勘違いされる!!見てみる周りの女子生徒なんてキャーキャー言ってるぞ!!

そんな内心パニックのオレとは違い、全く気にしていない美早。

諦めて美早と直結すると、

『今から私はリユウに1つのアプリケーションを送る』

アプリケーション?そんなのを送るためだけに直結を!?

まさか、ハッキングとかじゃないだろうな...いや美早はそんなヤツ

じゃない。じゃあなんだ？

『このアプリは今のリュウの全てを変える。そう、全てを…』

そう言った美早はとても儂く見えた。

『本当に世界が変わるってんならオレは受け入れるさ。それに美早は信用できるしな』

そう言うとき美早は、僅かばかりか頬を赤くなりながら、嬉しそうに笑みを浮かべてくれた。相変わらずこの笑みは、中々ドキッて来てしまふ。

こうしてオレはYESを選択した

そして美早はそのアプリケーションを送った。

その名を《Brain Burst 2039》炎に包まれた文字はそう書かれていた。

Now Loading…

ローディング長いな…

と思ったらローディング終了した。

『おめでとうリュウ。明日の私に会うまでローカルネットに繋がらないで』

『なんでまた明日までなんだ？』

『それは明日でないと説明できない』

『りょーかい。これから学校やバイトでも改めてよろしくな美早』

『K。今日の賄いスイーツよろしく』

『K、K。期待していてくれ』

と直結ケーブルを外してたわいない会話をしながら昼食を食べながら昼休みを過ごした。

こうして霧島龍元という転生者が変わるキツカケとなったのだ。

## 略奪者と半減者 加速世界

周りの人間が化け物、人殺しと罵詈雑言を小さいオレに投げる。  
何人も男がオレを殴る蹴るを繰り返してくる。

あまりの苦痛に耐える事の出来なかったオレは其奴らを殴り飛ばす。普通ではこんな風簡単に人はぶっ飛ばない。

コレはあの時、

あの男に両親を奪われた時、

オレという怪物が生まれたのだ。

あの時のオレの脳は自身の脳の制御を解除する事で本来ではありえない程のチカラを発揮し、男を突き飛ばす事ができたのだ。

そして、怯んだ男を果物ナイフで刺し殺したのだ。

この結果オレはあの男同様人殺しとなった。

そしてオレは筋繊維がズタズタになり一ヶ月も回復に時間がかかった。葬儀の日オレは車椅子であったため立ち上がる事が出来なかった。

一時期、オレが両親を殺したという噂も流れた事もあったが、警察のゲンさんという警部さんのお陰でオレの疑いは晴れた。

それでもオレが人殺しという事実は変わらないことに加えて、脳の突発的な制御解除によって、オレは無意識に物を壊してしまったり、他者に大怪我を負わせるようになってしまう。尚これに故意は無い。

それからは自分が制御出来ず、化け物、人殺しと言った言葉を言われ続けた。

そして、またオレの周りの人間はオレを拒絶する。否定する。追い出そうとする。

結局、どこまでいってもオレは人殺しだ

そこで意識は途切れた

「うわぁー！！はぁ、はぁ」

大粒の汗を垂らしながら龍元は飛び起きた。

「もう……克服したと思っていたのに……」

時計を見て8時前だということを確認すると直ぐに着替えて、朝食の支度を始めた。学校へ行く用意をしながら、この部屋のもう1人や、もう1匹の住人のご飯の用意をする。

「お〜い。起きろコマコマ〜起きないと強制ダイエットの刑の処すぞー」

と毎朝の恒例行事でもあるこのセリフを言うと、

ウニユアアー!!と雄叫びをあげながらオレが寝ていたベットの布団の中から飛び出て来たのは、コゲ茶トラにしては少々デブ猫化したオレの部屋の同居猫ことコマコマだ。

コマコマは元々捨て猫で両親がまだ生きていた頃オレが拾って来たのだ。現在8歳で人間で言うところの48歳だった筈。結構なオツさんと思っではいけないぞ。コマコマが怒るから。

コマコマにご飯を与え終え、食器も綺麗にし、身支度を整えて、「それじゃ〜コマコマ留守番よろしくな」

ニヤ〜!と相変わらずの適当な返事を聴きながら部屋を出て、駐車場に置いてある自身のニューロリンカー同様にメインカラーが白で所々が青いラインが入った大型電動オートバイで学校へ行こう………

とその前にちやんとローカルネットに接続しておかないとなくでない………迷う!!

もう一度あえて言おう………迷う!!

何故かは分からないが生前は方向音痴ではなかったはずなのだが、今はかなりの方向音痴なのである。

よってオレはいつも登校の際にニューロリンカーをグロールドネットに繋いでナビを出していないと何故か同じ所をグルグル回っ



てしまうのだ。

コレはアレだ。あの亀○人風の爺さん神による呪いか!?!と思つた夜、夢で『いやソレ違うから、単にお前が方向音痴になつただけだから。ソレも運の無さなのじゃヨク』と言つていた。なんかムカつく。

まあ余談はここまでにして頼りあるナビで学校へ向かう。

何か忘れているような気がするが気のせいにしておく。

場所は変わり、学校にて

ある程度オレの容姿をビビらずに話しかけてくれる相手は増えた。本来なら、こういうのは自分から話しかけていかなければならないが、中学生時代に話しかけただけで泣かれた事もあるため自分からは話しかけにくいのだ。

それを美早に知られてからかわれた事もあつた。

話は戻るが話しかけた奴らの大半は美早と付き合っているのか?という内容ばかりだつた。

美早の方も同じ状況であつたが『私とリュウはバイト仲間。』と説明していた。

門崎のヤローはかなりウザク絡んできたためアイアンクローで撃退した。しかし、数秒後に復活しオレも含めた周りの奴らを巻き込んで一押しアイドルの話を熱演していたらシヨン先生に頭をチョツプされて撃沈した。どうやら知らぬ間にホームルームの時間となつていたようだ。

こうして学校生活は中々満喫できていたりする。

午前の授業が終わり昼休みとなると、美早と屋上で昼食をとることとなつた。クラスの連中からはヒューウ!ヒューウ!と一昔前のリアクションでからかつて来た。無視だ無視だ。

「じゃあ、直結する。K?」

どうせ断つてもやる癖に了承しか出来ねえじゃねえかよ

「りよーかい」

やっぱりコードを接続するときは顔が近づくため照れる／＼／

それにいい匂いが……………

(いかん、いかん。)

妄想を振り切り美早と直結する。

無表情で淡々とされるとドギマギしているコツチがバカみたいだ。

それに美早は異性として認識してくれていないのか?

もしそうならそれは落ち込むな。

『リュウ、約束破った』

『ええ!?!』

と直結早々、いきなり約束を破ったと言われて、弁当を奪われた。

『ちよ、ちよつと待て!?!昨日はちゃんと賄いスイーツ作ったぞ!?!』

『N、昨日その前に大事な事を言った。思い出さなければ五秒起きに

リュウの弁当からオカズを貰っていく』

そ、そんな殺生な!?!

ま、待て!?!昨日といえはなんだ!?!

えーと、門崎のバカのアイドル自慢以外に何かあったはずだ。

・  
・  
・  
・  
つて!?!美早、早々と卵焼きやウインナー食わないで!?!

昨日は美早に内容が分からないモノをインストールされたはずだ。

たしか……………《Brain Burst》だった。

『《Brain Burst》についての説明だろ?』

『Y。でも今日私に会うまで何を約束していた』

『ま、まだ正解じゃないのか!?!』

『よってオカズ二個get』

ああー！卵焼きが無くなって野菜炒めがもう半分に！！

『ごめん美早。約束破って。何でもするからもう勘弁してくれ』

『K。リュウ、本当に何でもする？』

『するからこれ以上食わないでくれ。ご飯しか無くなっちゃう』

『K、私は昨日、今日の昼食までローカルネットに繋がらないでと言った』

あーそうだった!!完全に忘れてた！

学校へ行く前にナビ出すためにローカルネットに繋いだんだった。

『本当にゴメン美早。約束破って』

『K。それより学校へ来る途中何も無かった？』

『不思議な事は特に何も無かったぞ』

『ならバーストリンクと叫んでみて』

よくわからないが美早に言われた通りオレは言ってみた

「バーストリンク」

《バシィィィィ》といった先程聞いたこの効果音に包まれながら世界は青色に変わる

そして龍元の身体は霧島龍元の身体でなく学校のローカルネットを使っているアバター、現実のオレの身体に限りなく近い容姿に加えて一昔前の軍服に龍のツノを生やした姿へ変わった。

以前までクロ○もん似のアバターを使っていたが美早に強制的に変えられた。本人曰く「コッチの方がリュウに似合っている。」と言われた。

そして、美早も同様にローカルネットのアバターである猫耳に猫尻尾を付いたライダースーツ姿の美早が目の前に現れた。

「で、なんなんだ《Brain Burst》って?」

「《Brain Burst》とは対人格闘ゲーム、そして先程言ったバーストリンクは加速できる。」

「かつ、加速!?加速ってのは今のこの青色の世界のことか?」

「K。これはソーシャルカメラによるムービー映像のようなもの。けれど、少しづつ動いている。」

「マジか。こんな凄い力で格ゲーとか破格すぎねーか?」

加速という奇怪染みた力をそんな、ゲームに使うなんて開発者は馬鹿だな……馬鹿と天才はやはり紙一重か……

「では、今からリユウに対戦を申込む」

「い、いきなりだな!?なんでだよ?」

龍元は疑問を抱き口にした。

「NP。それは後で話す」

「りょーかいりょーかい」

龍元は美早に対戦を申込まれ加速し違うアバターになった。

気がつけば辺りが草原のような大それた舞台となっていた。

そして頭上には

1800という制限時間と青と緑のゲージの下には

《WHITE・ALBION》 vs 《BRAD・LEOPARD》

と表示されていた。

改めて自分の身体を見てみると、ロボットののような作りで所々に青い宝玉が埋め込まれているがメインカラーは純白の白だった。

これは確認できたオレは歓喜した。

生前からの憧れだった孤高の魔王の血を受け継いだ白龍皇ことヴァーリ・ルシファアと同じ白龍皇の鎧を見に纏う事が出来たのだ。

しかし、改めてオレと彼は違うと思った。

あの爺神が言っていたようにアルビオンはいないのだ。

アルビオンはヴァーリの相棒であり、頼れる仲間だ。

此方の方はオレ自身が白龍皇と呼ばれるアルビオンの名をアバターとしてオレ自身が名乗っていくのだと再確認した。

そして残念な事に翼はなかった。

何故翼が無いのかはわからないが

翼が無いことに疑問を抱いていると目の前に深紅の豹頭に細いネコ科の四肢を持ったF型のアバターが来た。

「……美早だー」N。ここでは《ブラッド・レパード》呼ぶならブラッドではなく、レパードで。縮めるならレパではなくパド」……了解。それがコッチの世界の姿ってわけだな?」

「Y。そういう認識で合ってる」

それにしてもローカルの方といい、コッチといいやっぱり美早はネコ科が似合うな。

「オレは《ホワイト・アルビオン》か……ちよつと名前に恥ずいな。なんであえてホワイトなんだよ、オレに全然似合っていないのに加えて、口がねーぞ！」

「うるさい。リュウを《子》にしたのは正解だった。」

「《子》ってなんだよ？」

「私が《親》リュウが《子》」

もう、やめてええ説明なしに専門用語言うの

と若干キャラ崩壊しかかっている龍元。

「なあ、教えてくれよ。この加速世界についての全てを……」

「K。1度しか言わないからよく聞いて。この加速世界には《レギオン》という集団のようなものがある。《レギオン》の代表的なものは7つある。」

まず1つ目が青のレギオン《レオニーズ》、2つ目は、緑のレギオン《グレート・ウォール》、3つ目は黄のレギオン《クリプト・コズミック・サーカス》、4つ目は紫のレギオン《オーロラ・オーバル》、5つ目は白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》。」

（だいたい多いな。でも、なんで全部宇宙に関連したものなんだ？）

「そして私のマスター、《スカレット・レイン》率いる赤のレギオン《プロミネンス》」

ブラッドの美早が赤のレギオンにいるってことは俺は白になるのか？

ん？待てよ、まだ6つしか言ってないよな

「パド。あと1つは？」

「あと1つは加速世界最大の裏切り者《ブラック・ロータス》率いる黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》」

「最大の……裏切り者……か」

その言葉の意味はまだオレには理解できなかった

「なあ、パド。さつきオレを子にして正解って言ってたよな。それは

「どうゆうことなんだ？」

「貴方の名前にはホワイト…つまり純色の白が含まれている。全てのレギオンマスターには含まれているのも純色。

「だけど赤のレギオンマスターには含まれていない。」

「それに今まで加速世界には色被れは存在しなかった。そしてリュウは白のレギオンマスターと同じ純色も持って生まれた。コレはそれだけリュウがイレギュラーな存在ってこと。」

「マジか。俺の何にイレギュラーを感じたんだろうな。この世界は………脳の突発的なリミッター解除か？それとも転生者だからなのか？」

「自身のイレギュラーの理由に頭をひねっていると、

「リュウのアバターの必殺技やアビリティや強化外装があるなら見せて」

「強化外装って武器のことだよな。」

「見せるって言うてもーっもないんだけど…」

「……なあパド、オレのアバター………必殺技もなければアビリティもないんだが……」

「NP。そのアバターはリュウの心が生み出したもの。リュウが信じてやればそのリュウも応えてくれる」

「………わかった。まあどう育ていくのか楽しみが増えたって思えばいいか」

「EAL\*。だからリュウも Heard Luck」

「ま、まあくせっかくパドが誘ってくれたんだ／／それなりに楽しむさ」

「リュウ、照れてる」

「照れてねえー！！」

「因みに私はプロミネンスのサブリーダー」

「マジか!？」

「意外にも目の前にとんでもない相手からゲームを教え貰えるようだ。」

「それにしてもさつき言っていた《親と子》ってなんだ？」

「私とリュウの関係はまず、ユーザー間でのコピーによるもので、コピー元のユーザーつまりは私が《親》、受け取ったユーザーつまりリュウが《子》になるの。でも子を慎重に選ぶ傾向があるの。コピー回数制限がかかっていて、1人のユーザーが《子》にできるのは原則として1人のみであるため、ユーザーは《子》を慎重に選ぶ傾向があるの」「その……よかったのか、そんな大事な一回をオレなんかに」「NP。私はリュウに受け取って欲しかった。一緒にこの世界を見て欲しかったから」

「……………ありがとうな美早／＼／」

「……またもや照れていることがバレしまいからかわれながらブレイン・バーストB・B  
にいつての最低限の事を教え貰った。」

そして今日の放課後に一緒に来て貰う場所があるそうだ。

因みにオレの食われた分のオカズは美早に少々分けて貰った。何故かあーん…で食べさせられた。メツチャ恥ずかった。

因みに美早は元々、オレの方向音痴を回避するためローカルネットに繋ぐ事は分かっていたようだ……………お察しの通りです。

## アキハバラBG

昼食のあと、いつのまにかオレと美早の弁当のやりとりが広がっており、門崎のヤローは『おいおい、付き合ってもないのにアーンとか羨ますぎるんだよオオ!!』と飛びかかって来たが、難なく撃破した。

門崎も本気ではなかったし、今のオレの反応速度と動体視力があれば大人でも余裕でノックアウトに出来る。

あの事件以降、今のオレの身体能力が格段に上がったためそれを制御するためにオレのニューロリンカーには、ある程度ではあるがこの異常の力を制御するためのプログラムが組み込まれているが、知り合いの甘党の天才外科医曰く『オレたち人間の脳はまだまだ未知に包まれている。だからこそスキミのニューロリンカーでもある程度しか制御する事が出来ないんだ。すまない完全に制御出来ず』と言っていた。リミッターはオレの無意識で外れる事もあれば、任意で外す事も可能だ。

そのため中学時代は無意識に物を壊してしまったり、人をキズつけしまったりもした。加えて難癖を付けてケンカを売って来たヤツとケンカもした。全員ボコボコしたけど。そんなことをすればどうなるか………答えは単純：孤立だ。その上、オレを気に入らないヤツらがオレの過去を学校中に広められたりもした。だからこそオレは弱くなりたい、消えたい、何処かへ逃げたいと思った時期があった。母の口癖だった『苦しい事も、楽しい事も半分』という言葉は当時のオレには苦痛でしかなかった。周りの人間がオレを拒絶するのにならうやって半分にすればいいんだと思った。でも美早はそんなオレを受け入れてくれた。あの時のオレは、周りに拒絶され、否定され、はき出されていたため荒れていた。そんなオレを見捨てず、ちゃんとオレの眼を見てくれた。すげー嬉しかった。だからオレを見捨てないでくれた美早はオレにとって妹や弟のような存在である千由里や拓武や春雪たちと同様オレにとってかけがえのない存在である。



時は流れて放課後、

美早と一緒にバイクでついて来てとしか言われていない。ローカルネットには繋いでいないため前に行く美早を見逃さないように運転するしかなかった。この2047年においてバイクや自動車が法定速度を破る事は出来ない。それは制御システムが自動的にその道路の上限速度でリミッターを掛けいるからだ。それでも、やっぱりこの時代でも交通事故は起きてしまうようだ。美早はせっかちな性格なため法定速度である80キロメートルであるにもかかわらず、ゼロ発進から上限に達するまでの時間が尋常でなく短いのだ。そのため気の抜けば美早見失ってしまうのだ。

しばらく2人でドライブングしていると、ニューロリンカーを通して思考音声で話しかけた。

『美早、そろそろ行き先を教えてください。いくらオレが方向音痴でも行き先ぐらいいは聞かせてくれないか?』

『S R Y、忘れてた。行き先は秋葉原』

『アキバって確か敵レギオンの領土じゃなかったか?』

『N P、目的地は中立地帯』

『りよーかい。んじや出来るかぎり安全運転で案内してくれ』

『K、しっかりとついて来て』

少ししてから秋葉原地区西端に近接する立体駐車場にバイクを入れ、2人で歩いて行くと、懐かしい光景があった。この時代の秋葉原は、現代の技術を吸収してはいるため、前世よりも騒がしい。

「懐かしいなあ……」

と一人でに前世に対する眩きをもらしていると、

「リュウ、こつち」

突然美早に手を繋がられた。いきなりだったためけつこうビツクリしたが、美早に手を引かれながら連れて来られた場所は、大通りから少し裏に入った所に建つ、一際うるせえビルだった。

入り口には《QUAD TOWER》というネオンが瞬き、奥の方には照明が絞られて薄暗い所だった。

「ゲーセンか？」

「K、ここでリュウにデビュー戦をしてもらう」

「マジか!？」

「マジ。詳しい説明は部屋でする」

と言つて美早と手を繋いだ状態のまま店内に入った。店内には今ではかなり見る事が出来ない懐かしい《アーケードゲーム》がズラリと並んでいた。こちらのゲーム機は、前世のお金いわゆるリアルマネーがいるのだ。この時代ではリアルマネーは時代遅れで電子マネーが普通なのだ。ちなみに龍元は昔懐かしさに、リアルマネーだけでなくプレ〇テなどのひと昔前のゲーム機を持っていたりするためゲーム好きの春雪とよく遊んだ事もあったのだ。

所持しているリアルマネーは小銭だけで千円近くあるため思わずアーケードの2D格闘ゲームをやりたいという衝動にかられそうになったが美早が頬を引っ張り現実に戻してくれた。

美早に案内される形でエレベーターに乗り、四階で停まるとドアの向こう側は頑丈そうなパネルで仕切られた狭いブースに右の壁際にはドリンクバーがズラリと据えられた。美早が無人カウンターで素早く受付を済ませて「こつち」と呼ばれた。美早曰く『ギリギリ、ペアシートのブースが空てた』らしい。良かったあーと内心安堵した。でなければ出直すか美早の事だ、一人用スペースを二人で使うと言うだろう。セーフだセーフ。

ペアシートとはいえ、結構な近さではあるがあえて気にせずにいると、

「足がつかないようフルダイブ用アバターを選択して」

「ん？……まあいいか」

美早に指示に疑問を抱きながら、アバターを久しぶりにクロ○もんに設定し終わると、

「出来たぞ。お前に変えられる前のアバターに」

「K、フルダイブしたら『アキハバラBG』のタグがついているアクセスゲートに潜って」

「りょーかい。カウントは3でいくか？」

「N。1、0で行く」

だろうな。お前はせっかちだもんな（〜；）

内心美早のせっかちに呆れながら素直に頷くと

「K、カウントする。1、0」

「ダイレクト・リンク」

意識と現実身体が切り離され、龍元たちは仮想現実へ誘われた。いくつかのアクセスゲートがあるが、目的のものではないため無視していく。龍元たちはグローバルネットを切断しているので、この『カドタワー』なるビルが運営しているローカルネットなはずだ。目的の『アキハバラBG』という目立たないタグを見つけ、選択すると視界が引き寄せられた。

伏せていた顔を上げると、あらゆる床と壁が赤錆びた鋼板と金網で作られた巨大な酒場ともクラブともつかない場所だった。なんとなくだが、テーブルで飲んでいるアバターたちは、オレや美早同様にバーストリンカーであると分かった。けっこういるなこのビルに。加えて、天井から鎖でぶら下げられている四面の大型モニターには、どうやら今日の対戦予告のようだ。デュエルアバター名、レベル、などが表示されていた。

少々困惑気味にとりにいる美早のアバターである黒いライダースーツを着た赤い女性の豹の獣人に話しかけてみた。

「パド、ここはどういう所なんだ？」

『アキハバラ・バトル・グラウンド』。バーストリンカーの、対戦の聖

地」

「アキハバラってことは、敵の、黄色のレギオンの拠点じゃないのか？」

「N。きつきも言ったけど秋葉原エリアで、ここだけは絶対中立」

ついて来てと付け加えながら、カウントーへ向かうとズングリ、ムツクリの髭もじやに赤いレンズのグラサンをしたドワーフ型のアバターがいた。

「こんにちは《マッチメーカー》」

ドワーフアバターは、美早のアバターを見た後、オレのクロ○もんを見てからふんと鼻を鳴らし、再度美早に向き直してニヤリと笑った。

「こりやあ珍しい客じゃな。久しぶりじゃな豹の」

随分と爺臭えなこのドワーフは……転生者か……いや考えるだけメンドクセエ〜

「ここの真剣勝負が恋しくなったか？それとも小遣い稼ぎか？」

「悪いけど、今日は対戦でも賭けをするつもりない」

「ならなんじゃ？勿体ぶらずに教えてくれんか？」

「今日は、私の子のデビュー戦」

「何!？」と驚きながらオレと美早を交互に何度も見ながら、やがて落ちて着いたのか、息を整えながら

「ほお〜お前さんが《子》をねえ〜コレか？」

とひと昔前のリアクションではある右小指を立てきた。対して美早は素早くマッチメーカーの立てた小指を本来なら曲がらない方向へ曲げようと曲げ始めた。対してマッチメーカーもおおお!!と悲鳴を上げながら抵抗している。しばらく二人のプチバトルが終わると、マッチメーカーがこのアキハバラBGについて教えてくれた。

アキハバラBGとは、ゲーセン《カドタワー》内でのみ接続できるローカルネット、賭け試合に出たいバーストリンカーはカウンターで選手登録をすると、システムがレベルや相性を考えて最適の対戦相手を選び出し、試合時間とオッズをモニターに表示するそうだ。そして、このローカルネットでの最大のルールは、マッチメイクされた選

手同士以外は《対戦》してはならない。ルールを破つたら《用心棒》がデュエルでブチのめすようだ。そしてローカルネットから叩き出すようだ。ここは、秋葉原を支配するレベル9の《黄の王》すらも手を出さない対戦者の聖地らしい。よってレギオンに関係なく対戦し放題のようだ。

「マッチメーカー、オレもここで対戦がしたい。登録を頼む」

「了解じゃ。そういえばお前さんのアバター名は何じゃ？」

「ホワイト・アルビオンだ」

「はあ!？」

自身の耳を疑ったのかカウンターから身を乗り出し来そうになったが美早がチャップで鎮静した。

「お、お前さん!!本当に色被れか!？」

「どうやらそうらしい」

「システムは嘘をつかない。彼はこの世界初の色被れ」

「まさかあえて《白》が被るとはなあ。やはりこの世界は何があるか分からんなあ」

「この世界は謎の分だけ楽しみがある」

「そうじゃな。では白いの選手登録をするからしばらく豹のと待つといてくれ」

「ありがたいなマッチメーカー」

おうと言いマッチメーカーはオレを選手登録してくれた。するとオレの対戦相手と対戦時刻が表示された。モニターを見ていたアバター全員が驚きまくっていた。ある奴は飲んでいたドリンクを吹き出し、ある奴は椅子から転げ落ち、ある奴は隣のアバターに顔を引張ってもらったりとさまざまなりアクションをしていた。

待っている間は、美早とテーブルで向かい合わせに座ると、

「リュウ、貴方のアバターは貴方自身が作り出したモノ。デュエルアバターにはそれぞれ等しくナニカ強みを持っている。今のリュウは眠っているだけ。」

「そうか?まあ出来かぎり無様な試合はしないようにするさ」

「リュウ、一番大切な事は勝つ事じゃなく楽しむ事」

「そっか分かった。出来る限り存分に楽しんでくるよ」

「K、リュウ、H e a r d l u c k !」

その言葉を聞いた直後、モニターに予告された試合時間ちょうどに龍元の聴覚に乾いた電鳴が叩いた。続けて挑戦者の出現を告げる文字列が視界いっぱいメラメラと燃え上がった。

《WHITE·ALBION》vs《VIOLET·BRUNHILD》

—————

デュエルアバター《ホワイト・アルビオン》として龍元が降り立ったのはビルの屋上のような。先ほどのパドといた景色とは随分と違うようだ。おそらく、このいくつものイルミネーションやライト、広告パネルをつけた飛行船やらがゴチャゴチャしたステージはパドが説明してくれた属性フィールドのようだ。多分《繁華街》だったはず。そして、オレの対戦相手の《バイオレット・ブリュンヒルド》は視界中央にある水色のカーソルの方向にいるようだ。

バイオレット色つまりは董色か……紫系統は遠距離の赤と近距離の青の中間に位置する色。バランスが取れた色だ。

ある程度敵の攻撃系統を予想しながらビルとビルとの間を飛び越える。リアルでもパルクールは出来るためコレくらいはチョロい。加えて、この身体はリミッターが外れた状態に近い身体能力があるため動きやすい。パドはコレを《完全一致》と言っていた。だから違和感なくこの身体を動かせる。

カーソルではアバター同士の距離は分からないが恐ろくかなり近くまで来たはずだ。ブリュンヒルドの方もオブジェクト破壊をしているのか必殺技ゲージが少し溜まっていた。オレの方も相手に貯めさせる訳にはいかないとためオブジェクトを壊していく。しばらくして残り時間が1650を切った時、ビルの貯水タンクからガタつ！と

何かを踏んだ音が聞こえた。音のする方へ視線を上げると長さが身の丈以上で鋭い槍を持った女騎士アバターが切り掛かってきた。咄嗟に身を低くし左へ転がって避ける。すぐさま起き上がり、敵と向かい合う。

「どうやら本当に色被れの様子ですね。驚愕です」

まるでソプラノ歌手のようなキレイな声で話しながらこちらの様子を見てくる董色でオレより鎧の様な身体をしているのに軽量そうで、まるでオーロラを思わせるようなキレイな水色の髪をした女騎士アバターが槍を構えている。

「そう言うアンタがオレの対戦相手の《バイオレット・ブリュンヒルド》か？」

「肯定です。ウェールズの白い龍。時間が惜しいので早急に続きを所望します」

「ああ楽しくバトローゼーブリュンヒルド!!」

オレは拳を、ブリュンヒルドは槍を構え同時に駆け出す、鋭い突き攻撃を最低限の動きで何とか躲しながら、オレも拳や蹴りを繰り出す。突きでは決定的ダメージを与えられないと判断したのか、今度は穂先と石突きによる斬撃を加えた変則的な動きに変えてきた。コツチはまるで踊っているかのような動きなため読めない。そのため穂先にオレの、アルビオンの身体は所々切られた。でもオレもただでは斬られない。石突きによる攻撃がきた際に、ブリュンヒルドの突きの速さに多少は慣れたため槍の柄の部分を握り動きを止め、渾身の力で腹に拳を叩き込んだ。ブリュンヒルドは槍を近くに落としながら、壁に向かって吹き飛んだ。すると、周りでオレたちの対戦を見ていたギヤラリーが一層に騒ぎ出しやがった。うるせえ。

上にある相手の体力ゲージは半分近くまで減った。対してオレはちょうど半分つて所だ。加えて制限時間も半分の900を切った。

ブリュンヒルドに追撃を仕掛けようと駆け出すと、ブリュンヒルドの方も既に槍を回収していた。

「宣言します。貴方の負けです」

「おい、どうゆう事だ!?!」

ブリュンヒルドの謎の勝利宣言に戸惑ってしまったのが悪手だった。

「『ブリュンヒルデ・ロマンシア』 あああ!!」

必要技コマンドを叫びながら大盾と見紛うほどの巨刃が付いた大槍へと変わった姿を変えた槍は、先ほどより長さが倍以上となり穂先に青い炎を纏いながら突っ込んで来た。明らかに先ほどと比べられないほどの速度だったため避ける事が出来ず、左腕を切り落とされ左肋を削られた。コレによりオレの体力ゲージは殆ど削られ、衝撃でビルから落ちてしまった。

強烈な痛みと共に、背中から掛かるGが尋常ではなかった。オレの頭の中にはこのままでは美早に見捨てられてしまうという焦りが埋め尽くした。初戦でプロミネンスのサブリーダーたるパドの顔に泥を塗る様に無様に負けたら、オレは……美早に見捨てられる。

いやだ! アイツに、美早にだけはオレを拒絶した奴らと同じ目で見たくはない! だから頼むホワイト・アルビオン! オレはまだこの世界で心の底から楽しみ切れてないん! まだ満足してねえ!!

だから、だから!!

「翔べええええええええええええええええ!!!!」



## ホワイト・アルビオン

私、掛居美早ことブラッド・レパードは、今自分の子である大切な友達のリュウことホワイト・アルビオンの戦いを観戦している。

勝つても負けてもいい。勝つたらめい一杯抱き締める。例えば負けても落ち込むであろうリュウを慰める。そしてコレからの対戦についてレクチャーする。リュウが心から楽しんでくれるのなら、私はそれで満足。他のギャラリーたちが口々にリュウたちの対戦についての感想を言い合っているがどれも興味がない。対戦相手の董色の女騎士アバターは、槍を使った近接系統な筈。リュウの元々のファイティングスタイルは拳と蹴りで喧嘩慣れもしているから彼女といい試合をしている。でもリュウに無くて彼女に備わっている物がある。それは必殺技だ。リュウに必殺技についても説明をしたけど、有ると無いではかなりの差が出てしまう。

そして試合はリュウの渾身の一撃でブリュンヒルドを吹き飛ばした。Nice Punch。追撃を加えようとしたがブリュンヒルドから繰り出された必殺技により左腕を切り落とされ、ビルから落下してしまった。体力ゲージはもう殆どない。残り時間はまだ残っているがこのままではリュウは高所からの落下の衝撃で負けてしまう。他のギャラリーたちが口々に「全然ダメじゃん」「見掛け倒しかよ。あの色被れ」とリュウの悪口を言う。ムカつく。誰もがリュウの敗北を確信した、でも私は全くそうは思わなかった。だってリュウの、アルビオンの体力ゲージはまだ残っているのだから。



込める程の青い2枚の光翼を持つ者は一人だ。

孤高の白龍の皇帝に憧れたホワイト・アルビオンこと霧島龍元だ。

本当に翔べた。オレが、ヴァーリのように空へ登る事が出来た。誰もがオレに驚愕している。当然と言えば当然か、オレもビックリだ。オレ達の対戦を観ているギャラリー達の中にパドがいた。

ありがとうな、美早。お前が言ってくれた様にコイツはオレの願いに応えてくれたよ。観ていてくれ、オマエの子のバトルを!!

「待たせたなブリュンヒルド。ここからは第2ラウンドだ!!」

「驚愕です。まさかN・ネガ・ネビュラスNの《銀の鴉》と同じく飛行型アビリティを持つ者が現れるなんて奇想天外です」

「それがどうした!今は関係ねえ話だろーが!!」

「同意です。しかし私が貴方に勝利します。《フラグメンツ・ワルキューレ》!!」

蒼く輝く光翼を手にしたオレはブリュンヒルド目掛けて突っ込む。対するブリュンヒルドも自身のアビリティを発動し水色のオーラが身を包み込んだ。

翼を手に入れた事でリュウは、光翼による瞬間推進力によりブリュンヒルドの槍術を軽々と躲し空中から繰り出す変則的な攻撃がブリュンヒルドの体力ゲージを減らしていくが明らかに体力ゲージの減り具合がおかしい事に気付いた。不審に思ったりリュウはブリュンヒルドから距離を取った。

「そうか、お前のアビリティは自己回復能力か!？」

「肯定です。私のアビリティ《フラグメンツ・ワルキューレ》は微弱ながら自身の体力ゲージの回復です。貴方の拳では私の体力を減らす事は不可能。よってこの勝負は私の勝利です」

「ハッ!!残念だったな勝負つてのは敗者を決定して初めて勝利者が決まるんだよお!!」

「ッ!!」

残り時間が僅かとなった事を確認したりユウは雲より高く飛翔するが、一定の域に達すると高高度からの加速度を威力に転換した《急降下重攻撃》<sup>ダイブ・アタック</sup>を繰り出した。対するブリュンヒルドも槍を構え迎撃の構えを取ったが意思を持った隕石のようなスピードで加速してくるアルビオンの蹴りを何とか躲けてみせた。しかし、ブリュンヒルドが自身の蹴りを躲す事を予想していたりユウは、地面に着地した瞬間に右足を軸に遠心力を使いブリュンヒルドの居る方向へ何とか向き合った。これにより僅かに残っていた体力ゲージがよりゼロに近づいてしまった。ブリュンヒルドはアルビオンの身を切る行動に眼を見開くほどの驚愕を露わにした事で大きな隙を生んでしまった。

この出来た隙を見逃すりユウでは無かった。

残っている右腕をブリュンヒルドの首元へ伸ばし、見事ブリュンヒルドを捕まえる事に成功したりユウは、すぐ様高高度へ飛翔するや否や、ブリュンヒルドを離れた。離されたブリュンヒルドは身動きが取れる事も出来ず重力に従い急速に落下していく。落下するブリュンヒルドに追撃とばかりブリュンヒルドより高高度の位置から加速度を威力に変えた二度目の蹴りである《急降下重攻撃》<sup>ダイブ・アタック</sup>を繰り出した。微弱に回復していたブリュンヒルドはアルビオンによる追撃をモロに受け事で体力ゲージを一気に失いそのまま落下し、ブリュンヒルドの体力ゲージはゼロとなりアルビオンの、いや霧島龍元の勝利が確定したのだ。

この状態になると、デュエルアバターは加速を終えるまで動けない言葉を発せないの浮遊霊のようなものになる。

そしてリュウの視界には【YOU WIN!!】の炎文字が現れて、リザルト画面に切り替わった。

しかしそれよりも衝撃を受けたのは、その対戦を見ていたギャラリィ。

皆が皆驚きの声をあげ、何やら慌ただしく言葉を交わしていた。それもそうだろう。

レベル1の見たことも聞いたこともない新人が、突然飛行アビリティを使い、見事大逆転勝利したのだ。これに驚かないバーストリンカーなどほとんどいない。こうしてリュウこと《ホワイト・アルビオン》のデビュー戦は、白星で華々しく飾ったのだった。



一瞬の目眩を覚えたが程無くして全身の感覚が戻ったのを感じていると、

「……………ウ……………リュウ……………リュウ？」

「あ、ああゴメン美早、大丈夫だ」

何度も美早に呼ばれている事にすぐには気づけなかったのは申し訳ない。

「美早……………オレ勝てた」

「うん」

「オレ、翼で翔べた」

グット・ゲーム  
「G G リユウ、お疲れ様」

オレへの労いの言葉を言いながら美早はオレを抱き締めてくれた。思考が停止した。

「……………み、みみみ美早!?!?!」

「店内では静かに」

いやいやいやいやそういう問題じゃあーねえーだろーが!?!それに美早の柔らかい身体と接触している際にオレの精神パラメーターは加速しっぱなしなんだよ!!

しばらく抱き締められた状態から脱出出来ないままでしたが多少

は落ち着く事ができた。

「オレさあ、ビルから落ちていく時お前に見捨られると思っちゃったんだ」

「……………」

「『プロミネンス』のサブリーダーの美早の子なのに何にもアビリティも必殺技も出せないままずっとこのまま負け続けるのかって思ったら怖くなっちゃってな。情けないよな？」

「……………そうは思わない。私もそういう風に怖くなった時期があった。だからNP」

「そっか……………ありがとうな美早。楽しかったよあのゲーム」

「良かった。リュウは私にとって私の王と同じくらい大切な存在だから見捨てたりなんかしない」

その暖かい言葉を受け、

「その……………もう少しこのままでもいいさせてくれ」

「K」

暫くの間、狭い個室で美早と抱き合っていた事を寝る前に改めて思い出した事でベットの所で悶えまくってコマコマから顔面をツメで少々整形されたのはまた別のお話。



あの後、もう3戦をし今日で2勝1敗となりまずまずの戦績となった。敗因は黄色系統の麻痺で高高度からの落下後にトドメを刺された。美早によりば最初でこの成績は良い方だと言ってくれた。そしてお互い帰宅し、オレはもう少し自分のアバターの闘い方を知るために7戦し、戦績は4勝3敗となった。そしてグローバルネットを切って寝た。

その日、ある夢を見た

雲一つない青空の元、黒き禍々しい剣を携えた黒き騎士が先導者となり率いる黒の軍勢と白き神々しい剣を掲げる白き騎士が先導者となり率いる白の軍勢が大地を戦場へと染め上げる

大地は戦火に燃え、青き空を血のような赤い空へと、多くの戦士だったモノから流れる液体が大地に血の池を作る

そして最後の1人となった者はチカラ尽き地に倒れる

この戦いに勝者はいない

ただ虚しさ、悲しみ、怒り、絶望……

様々な悪感情だけがこの地に留まり続ける

なんでこんな夢を観たのかは判らない。

でも主人を失った武器達がまるで消えゆく主人をこの地にいたと言う事を憶えて貰うために墓標代わりを務めるかのように観えた。

そして意識が途切れる瞬間

『忘れないで』

という言葉を聴いたのだった



いつもの朝の恒例行事である愛猫コマコマを起こしてから、対戦を申し込まれる事を覚悟し、ナビに繋ぐためグローバルネットに接続してから発進する。

暫く走行していると、突然初期加速空間ブルー・ワールドとなつてすぐに対戦フィールドにホワイト・アルビオンとなつて降り立った。これは対戦を申し込まれた事を意味する。

そして対戦相手の名に驚き隠せなかった。その名前とは、

《アジュール・デイエンド》

名前に驚きを隠せずにいると、背後から視線を感じすぐ様飛び退くと、先程までいた場所に光弾が撃ち込まれた。

「へえ、今のを躲すのか。中々期待できそうだね

《白い龍》？」

「青系統のクセに遠距離とか矛盾しすぎだろ」

今回のステージは深夜の廃墟を錆びたドラムカンからちらちら上がる炎が照らし出すし、建物のガラスは派手に割れており、柱は一部崩れ落ち、外壁には大穴が開いていたりする。オレに光弾を撃つて来た相手は、この《世紀末》ステージのビルの屋上から此方を見下ろしているアバターがいた。メインカラーが青系統のアジュールつまり紺碧色で顔と胸部と両肩にバーコードのような黒い板が突き刺さつたような姿をしたアバター。

「よく言われるさ。さあ彼女と同じ色を持つキミの実力をボクに見せてくれたまえ」

「言われるまでもねえーよ！」

翼を展開し、いつもの高高度からの奇襲とは違い今は、地面スレスレの低空飛行で撃ち込まれてくる光弾を躲しデイエンドへ急接近する。対するデエンドは全く動かず、右手に持っている二連銃の銃身側面中央部にいつのまにか持っていたカードをなんと挿入したのだ。そして銃身をポンプアクションのように前にスライドさせトリガー



を引くと、

『ATTACKRIDE INVISIBLE』

という電子音が鳴り響くとデイエンドの姿が消え、カーソルからも方向を確認する事が出来なかった。しかし、必殺技ゲージは減っているため永遠に消えていられるわけではない。そのため、一旦先程までデイエンドがいた場所に降り立ち、持ち前の第六感で探ってみる。

さてと、ヤツが攻撃して来ないのなら透明化状態では攻撃不可能と考えるのが妥当か？いや、敢えてそう思わせて奇襲をしてくるとも考えられる。デイエンドの透明化への対策に頭を捻っていると、カタツ！と石が転がる音が聴こえた方向は背後だったので回し蹴りを放つと確かに蹴りが当たった感触があった。するとデイエンドの体力ゲージが三分の一ほど減り、何も無い筈の背後の地面が削れた。

「いやはや、つつい石コロが当たってしまったか。それに気づくキミも中々だね」

「ワザと分かるように石転がしたろ？」

「さあどうだろうね。なら次はこれで行こうかな？」

『KAMENRIDE CAMEL TOROOPER』

再度別のカードを挿入しトリガーを引くと、キヤメル色つまりらくだ色の目も口を丸々隠す程のバイザーをした格闘型アバターが一気に三体も現れた。

「彼、キヤメル・トルーパーは分身能力を持つアバターでね。本体を倒さなければ分身し続けるから頑張って倒したまえ」

そう言っでデイエンドは別のビルへ渡り傍観に徹し始めた。

命令を受けた三体のトルーパーというアバターと戦う事になった。トルーパーの体力ゲージは存在しないためナニカしらのダメージを与えれば消えるはずだ。中学時代に複数人と喧嘩していた事も多々あるため攻撃を避ける事ができる。1人のトルーパーが銃剣で斬りかかって来るが身体を捻って避けると、避けた方向にもう1人のト

ルーパーが銃弾を放って来る。しかし、斬りかかって来たトルーパーの首を掴んで盾に使うと、盾に使ったトルーパーはヘッドショットを喰らい消滅した。残っている最後のトルーパーもオレの死角から銃撃してくるが、残りのトルーパーがオレの死角へ回り込むのを見ていたので、銃弾は左肩を掠っただけで済んだ所で、

オレたちのいるステージの空中にノイズが広がった。

オレも傍観に徹していたデイエンドやギャラリー達も驚きを露わにし固まってしまった。

どうやら、こんな事態は誰もが想定外の様だ

そしてノイズが空を埋め尽くすと、

一番酷いノイズからあの夢に出て来た黒き騎士の禍々しい剣よりもっと禍々しく見ているだけでも背筋が凍る様な感覚を覚える程のオーラを放つ黒き邪龍がこの加速世界に降り立った



そうしている内にちまちま攻撃を仕掛け来るオレ達を等々邪魔と思ったのか、龍は先程よりも凄まじい咆哮を放った。

これにより地上にいるデイエンドは咆哮による余波で怯んでしまった。この致命的な隙を見逃す龍ではなかった。龍は、デイエンドを視界に捉えると口から自身のオーラより禍々しきさを出す熱線を放った。

先程までであった瓦礫の山は一瞬で灰と化し、ステージを火の海に染めた。邪魔なゴミを排除した龍は此処にもう用は無いのか、翼を広げ、元来たノイズが覆い尽くす空へ戻ろうとすると、

「何処へ行く気だ？」

2つの目障りな声を耳にした。

「デイバイン・デイバイン白龍皇の光翼グ!!」

『Divide』

そして、1つの必殺技の発声が聴こえた後に鳴り響いたのは、静かな電子音だった。

しかし、この電子音を耳にした龍は自身の体にある違和感を覚えた。

それはまるで自身のチカラが根こそぎ半分まで奪われた様な感覚を覚えたのだ。

龍は自身の体に起こった異変に気を取られている隙に背中に猛烈な痛みが襲ったのだ。痛みの正体を確かめるため龍は痛みの原点へ首を向けると、ノイズが覆い尽くす空でも一様輝き放つ真つ白なアバターが自身の背中に拳を打ち込んでいたのだ。

「よおう、会いたかったかクソドラゴン？」

真つ白なアバター、ホワイト・アルビオンは龍の返答も待たずにそのまま背中に拳のラッシュを打ち込んでいく。先程まで全くダメージを与えられなかったのに、今度のパンチはちゃんと龍へと届いており、先程より急速に龍の体力を減らしていく。

龍元つまりホワイト・アルビオンのチカラが上がったにはあるカラクリがあるのだ。

その正体は、飛行アビリティを発現したその日に共に発現していたアルビオンの必殺技だったのだ。

必殺技名は《デイベイン・デイベイデイング白龍皇の光翼》

必殺技発動時に翼とアバターに埋め込まれている宝玉から青い光を放つと同時に『Divide』という電子音が鳴り響くのである。

そして、その効果とは、『半減』。

触れた相手のチカラの半分を我が物とし、自身のチカラにプラスという恐るべく効果を持つ必殺技だったのだ。

これによりノイズから出現した黒い龍のチカラの半分を奪い取り、黒い龍の半分のチカラをプラスした自身の拳で黒い龍へとダメージを与えたのだ。

流石にずっとやられっぱなしの龍ではなく、自身に取り付いているアルビオンをすぐ様振り払うが、

「随分と僕たちを舐めまくっているようだね」

《FINAL ATTACKRIDE DDDDDEND》

「デイメイションシュート」

左眼へ向けて放たれたエネルギー波により、左眼を失う。

2人の息のあったコンビネーションにより左眼を失った痛みで龍はのたうち回る。意味もなく暴れ回るため距離を置き、観察していた左肩から先を無くしたデイエンドの真横に龍元は翼を畳み降り立つ。本来ならデイエンドは先ほどの龍が放った熱線に全身を包み込まれ、跡形も無く消し飛んでいたのだが、ギリギリのタイミングで龍元が助けに入ったことで左腕だけで済んだ。そして、左腕を失ったことで生まれたダメージによって必殺技ゲージを満タンにしたデイエンドは龍元ことアルビオンの必殺技によって生まれた隙に自身の必殺技を叩き込んだ。

「よし、行けるぞー！」

「安心は出来ない。着々とダメージを与えていこう」

「しっかりとカバーしろよ」

「さっきの借りは返すから安心したまえ」

即席とはいえ作戦が成功したことに2人は密かに喜びながら、追撃を行うため龍へ駆け出す。



結果的に言えば負けた。2人して。

左眼をヤラれてブチ切れた龍は、最初の倍くらいのスピードで俺たちを翻弄した。更に加えるなら、動きのキレもまるで洗練された戦士そのモノだった。片腕しかないデイエンドが先に倒され、それに続くように俺ことアルビオンもあっさり倒された。悔しくないと言えば嘘になる。加速世界から帰った後、いつのまにかニューロリンカーに知らない相手からメールが来ていた。バイクを駐車場に置いてからメールを開けると、

『親愛なる白き龍へ』

さっきのバトルは中々楽しかったよ。

色々アクシデントはあったが、

キミのアドバイザーを知ることができた。

何かあれば、遠慮なくボクに言いたまえ。

チカラになろう。

では、近いうちにまた逢おう』

という内容のものだった。メールにはデイエンドの紋章が付いていたためデイエンド本人で間違いのないようだ。加えて、メールの中にメアドがあった。連絡があればここに送りたまえと書かれていたから、デイエンドのメアドとみて間違いのないようだ。デイエンドとの一戦以降、誰からも対戦を申し込まれることもなく学校へ着いた。その後、授業を受けながら美早に話があるとだけメールで知らせておいた。あのエネミーについて美早なら知っているのではと思って。そして、数秒と待たずにOKの返信が来た。

そして、時間は流れて昼休み。

もはや恒例となりつつある美早と直結を行い、今朝あったことを話す。

『——ということがあったんだが、美早はどう思う?』

『バーストリンカーの中でそんなエネミーと遭遇したって言う事は耳にした。でも、リュウが巻き込まれるなんてビックリ』

『デイエンドのヤツも想定外って言うていたけど、アイツは何者なんだ情報屋とか名乗ってたけど』

『彼は元黒のレギオンのNo. 3』

『マジか!?』

『マジ』

自分が戦った相手の経歴に驚きを露わにし、思わず持っていたコツプを握りつぶしそうになってしまった。また無意識のうちにリミッターを解除してしまったことを恥じてしまう。

『彼の情報収集能力はかなりのモノ。その上、その実力は折り紙つき』

『そーか。悪いなわざわざ』

『NP。私はリュウの親。レクチャーするのは当然』

あの頃から、ずっと美早には助けてもらってばかりいる自分に不快感を感じてしまい、このままずっと美早に甘え続けていくかもしれない自分に嫌気を募らせてしまう。

その結果、

『そう言ってくれるのは有難いが、俺はやっぱり……………美早に頼りたくないな』

『……………え?』

最低なことを言ってしまった。

この時、俺は美早がどんな表情をしていたのかはわからない。ただ、くだらないプライドが邪魔をして見れなかった。いや、見ようとしなかった。

『美早だってプロミネンスのサブリーダーとしてやる事があるのに、だから、こんな奴のいつまでかまっ「バカー!」ッ!』

美早の顔を見ようとせず話していると、普段から物静かな美早が声を上げて俺を怒鳴った。美早の声にビックリしたため、改めて美早に



向き合うとしたが引つ叩かれてしまい、それは叶わなかった。そして、思っていた以上に美早は力を入れて引つ叩かれたようで椅子から転げ落ちてしまう。立ち上がって美早に文句でも言おうとしたが、そんなことなど美早の顔を見てしまった時点で消え失せる。

なぜなら、

彼女が瞳に涙を溜めて今に泣き出しそうな顔をしていたから。

「っ!？」

この時、漸く俺は気づくことができた。

美早を深く傷つけたこと。

「(ハ、ッ)——」

「——もうしらない!」

俺の謝罪なんてクソ喰らえかのように美早は言葉を遮り、走って出て行ってしまった。追いかけてようとしたが人混みで見失い、昼休みが終わるギリギリまで探すものの美早にきちんと謝ることができなかった。放課後もちゃんと謝ろうとしたが話を全く聴いてもらえず、美早は誰よりも早く帰ってしまう。

自分がしてしまったことへの重大さを痛感し、屋上で電話やメールを送っても美早は返信してくれなかった。屋上で来るはずの返事を待っていると、

「オヤ?先客ガイマシタカ」

「シヨーン先生?」

担任のシヨーン・コネコネ先生が屋上のドアを開けて入って来た。そして、シヨーン先生は入ってくるや否や俺の隣へ腰を下ろす。

「彼女サンと喧嘩ヲシタヨウデスネ?」

「美早は彼女じゃないですけど……俺が傷つけたのは事実です」

「彼女ハ何ト?」

「いえ、何も。話を聴いてもらえず仕舞です」

「ソレハ困リマシタネ」

「いえ、当然です。今までも色々助けしてくれたのに、俺の自分のくだらないプライドの際で……」

もう美早との関係は元には戻らないとネガティブなことを考えていると、いきなりチョップを喰らわされる。

「イデッ!？」

「ソコマデ反省シテイルノデシタラ、尚ノコト謝ルベキデス!!どんな方法デモ貴方ノ想イヲ彼女ニ伝エナケレバ、彼女ハ貴方ノ気持ちヲ理解デキマセン!逆モまた、然リナノデス!!」

割と痛かったため頭を抑えようとすると、シヨーン先生が頭を撫でながらどうするべきなのかを伝えて来てくれた。

「……ありがとう先生。ちよつと荒療治かもしれないけど聴いてもらうよ」

ちよつとシヨーン先生を父親みたいだなって密かに思いながら、荷物を片付け、バイト先であるパティスリー・ラ・プラージュに電話をかける。すると、運が良かったのか美早が出てくれた。

「美早、俺だ!切らないでくれ!!」

「……………」

「営業中なのにゴメン!!それと、さっきは本当にごめん!!すまなかった。俺のくだらないプライドの際で、美早を傷つけたこと、美早の気持ちを含く理解しようとしなかったことをちゃんと謝らせてくれ」

「……………」

「幾らでも殴つても、クビにしてくれても構わない。だから、お願いします。ちゃんと面と向かって謝りたいから……俺は美早に逢いたい」

「……………」

「ありがとう。それと本当にごめん。ワガママばかり言って」

「もうSRYはいい。リュウが何でも私の言う事聞く権利、今日使うK?」

「ああ、何でもすると言ったのは俺だ」

「明日は休日。学校休み。だから、今晚リユウの家に泊まるから迎えに来て」

「え？」

「返事は？」

「ええ!?!わわ、分かりました!!」

「19時丁度に店まで迎えに来て」

「ちよツ!?!美早『プツン』……マジか」

ちやんと面と向かって謝る機会を与えてもらったが、とんでもないモノを要求されることになるとは予想外だった。半ばヤケクソ気味になりながら、きちんと美早に謝れると気持ちを切り替えてるのであった。